

最終例会にあたり

山下 憲男幹事

奥山 聡会長

1980年、私はベトナム戦争で生み出された難民キャンプにヴォランティアとして行きました。狭い敷地に沢山の難民がいて、ウィルス性結膜炎とコレラが流行していました。医療体制は不備で、毎日、発症した難民が病院に搬送されていました。キャンプの中にUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)がありました。事務所と言っても、壁はなくコンクリートむき出しの柱と床と天井だけという建物でした。そこに机を置き職員が一生懸命書類を書いていた。難民の受け入れ国を必死で探しているのです。

キャンプに通ってしばらくした頃、カンボジア人の難民でコンレンさんという男性に話したいと呼ばれました。彼はとても柔和な笑みを浮かべた方でした。ですが、彼の脚はエビの尾のようにグニャッと湾曲していました。彼は元数学の教師で、インテリ層を憎んだポルポトの軍隊によって拷問された結果です。命の危険を感じた彼は、親せきと14人でカンボジアを脱出しました。しかし、途中で兵士に見つかり機銃掃射を受けました。障害者の彼をかばって逃がし、12人が犠牲となりました。彼と従姉しか逃げられませんでした。「この実態を多くの人に伝えて欲しい」と言われて、社会科の教員になろうと決心しました。

コンレンさんは、この時も一つ言いました。「ここまで来ているあなた自身は素晴らしい。しかし、日本を見てくれ。難民を全く受け入れない。冷たい国だ。あなたは素晴らしいが、まず自分の国を良くしなさい。」と。帰国してみると、当時日本政府が認定して正式に受け入れたベトナム難民は27名。狭き門。この話をあちこちで話すと「日本は国土が狭いから仕方ない」という人が少なからずいました。あのスイスでさえ2,000名以上も認定しているのに。この国は何か歪んでいる。そう思いました。だったら、自分は真っ直ぐ生きて、曲がっていく世の中の思いつ切り邪魔者になってやろうと考えました。人間にとって、一番大事なこと。私は、「真っ直ぐであること」だと思っています。

今期当初、当クラブの雰囲気は必ずしも和気あいあいとしたものではありませんでした。大先輩に「今のクラブはバラバラじゃないか! どうするんだい!」と言われました。考えました。結論は、真っ直ぐ対応する。真っ直ぐ聴いて、真っ直ぐ話す。そう心掛けました。なるべく、多くの方の意見を聴く。理事役員会では、問題点や意見の相違点をむしろ明らかにして誰にも分かりやすくし、討論しやすくなるようにしました。そして、結論が出たら、着実に実行する。討論が有意義なものになるよう努めました。どうでしょうか? 私としては今期当初よりも話しやすい和やかなクラブになって来ているように感じます。

会長就任当初にお話しましたように、私は飲食の親睦会を企画運営するのは得意ではありません。その点は、ご不満の方もおありだったのではないのでしょうか。申し訳ありません。

ただ、ウォーキングクリーンプロジェクトのように、体を動かして、しかも地元の勉強をしながら奉仕する親睦は、実に楽しく良い思い出になりました。そして、締め飲食は充実した気分になりました。企画運営して下さった皆さんに感謝申し上げます。これと言って、何かできたという成果を上げた会長の仕事ではありませんでした。来期は、人生経験豊かな永井新会長の下、お茶の水ロータリークラブが発展していくことと期待しています。永井さんよろしくお願い致します。一年間、有難うございました。

皆様方のお陰で無事幹事の役を終えることができました。厚く御礼申し上げます。

幹事を拝命し、まずはクラブを成功に導くリーダーシップ幹事編を手に取り「責務」の1~16項目をチェックしてみました。伝統ある当クラブでは事務方の須永さんが永年培ったノウハウで基盤がしっかりしており16項目に沿った幹事の責務の殆どが停滞することなくスムーズに遂行できたのではないかと考えております。

本来ならば幹事が自ら手順に従い遂行すべき責務が無難にこなせる当クラブ運営のありがたさを感じながら事務局と連絡を取り合い会長と幹事は、「運営責任者と執行責任者」という意味での『車の両輪』を目指し、先輩諸氏のご指導に支えられた1年間でございました。

また、当クラブの会員として、幹事として自分が出ることは何だろうと考えました。特に若い会員を増強しクラブが若返り活気にあふれるように努力することが必要と感じて若手会員の増強に努めました。私なりに考えたロータリアンの卵を探し出すポイントは2点ございます。1点はアップルの創設者であるスティーブ・ジョブスの有名なスタンフォード大学での卒業祝賀スピーチの最後で述べた「ハングリーであれ、愚かであれ(Stay Hungry. Stay Foolish.)」また、旧制七校の寮歌「北辰斜めにさすところ」がタイトルの映画では新入生に緒形直人ふんする寮の先輩が「天才的なばかになれ」と一括する場面がありました。

「天才的な馬鹿になれる資質のある若手」。2点目は日経新聞の交友抄で目にとまった建築学者 上田篤さんの叔父である生物学者 今西錦司さんに、フランス文学者 桑原武夫さんは「あいつはできがいいなあ」という記事。できとは何か? と尋ねると、「これは誰にもゆうたらあかんで。とくに新聞記者には絶対ゆうたらあかんで」と前置きしておもむろに言った「できとはなあ。生まれつきや」。この2点を私なりに参考に人選しております。

更に次年度は当クラブのビジョンの作成役を承りました。当クラブの発展のため、1年単位で出来ることと、3年から5年後の近未来を見据えた魅力ある当クラブのあるべき姿のビジョン作成が目的となっております。当面は入会が若い会員8名(岩佐、木宮、笠原、岡田、木村、相倉、神保、海江田)によるビジョン作りで3カ月ごとに例会で進捗状況を発表する事となっております。

引き続き、会員皆様方のご指導、ご鞭撻の程何とぞよろしくお願い申し上げます。



永井副会長、西村副幹事より花束贈呈

閉会点鐘

奥山 聡会長